

◆久松久子 選 ～思ひ出の一句～

「父の教え」

戦時下、軍隊の中隊長をしていた父に、ニューギニア派遣の命令が出た。同じ町内で私の学友の家にも同じ命令が出た。しかし、友人の家は小さな子どもが多く生活が困窮していたので、中隊長としての父の一存で、ニューギニア行きを免除してもらった。その友人とは、一緒に勉強をしたり遊んだりしてとても仲が良かった。

父の帰国後のある日、私の家でその友人と宿題をしていた。友人がチョコレート色の消しゴムを使っていたので、父に「こんな消しゴム買って」と見せに行った。すると父は、「今の消しゴムを使い切ったら買ってやる」言った。そして、「人が持っている物を欲しがる子は、ろくな人間にならない」と、大きな手で私のお尻を叩いた。友人はびっくりして家に帰ってしまった。あの時の父の言葉とお尻の感覚は、ずっと私の中に残っている。

戦争の話遺して秋夕焼

久子

「父の買ってくれた上靴」

終戦直後の頃の話になるが、茨城県の女学校に通っていた頃の服装は、上は制服で下はモンペ、足は下駄履きだった。通学の汽車の中は、東京からの闇屋が田舎に米や野菜を買いに来るのでいつも満員だった。屋根のない貨物車に乗ることもあった。

そんな時代のある日、ニューギニアから復員した父が、東京の間屋に出かけた折に、学校で履く上靴を買って来てくれた。白い靴に水色の線の入った靴で、田舎では見る事のない物だった。当時の上靴といえば草鞋の人が多く、父の買ってくれたような靴は誰も履いていなかった。私は、早速学校に持って行き、上靴なので学校の靴箱に置いて帰ったが、一週間もしない内に無くなってしまった。びっくりして急いで探していると、私の上靴を履いている子を見つけた。「それ私のよ」と言ったが知らん顔をして返してくれない。先生から話しても

らって戻ってはきたが、先生はその時「返しなさい」と言っただけで叱らなかった。本人も「ごめんね」の一言も無かった。

今でも、あの時の先生と級友のことが忘れられない。うらやましがるような物を持って行ったのがいけなかったのかもしれないが、なぜ先生は叱らず、本人は謝罪しなかったのか。

戦後の荒みきった世の中で、大人も子どもも善悪の判断ができなくなってしまっていたのか。どんな世になっても、人の心を失いたくないものだと思う。

過ちの友は何処や秋の暮

久子

「夏休みの日記」

小学一年生の夏休みが終わって、二学期最初の朝礼の時、突然、名前を呼ばれて壇上に出ることになった。何が何だか分からず、もじもじしていると、校長先生が賞状を読み始めた。私の夏休みの日記が、全校生徒の中で一位に選ばれたのだった。受持ちの先生は、びっくりさせようとして何も知らせなかったようだった。賞状を読み終え、校長先生が手を伸ばしてくださったが、賞状の書き方が分からない。お辞儀もしないで、片手でひったくるように取ってしまった。生徒も先生も大笑いとなり、三年生の姉には「大恥かいた」と家に帰ってから叱られた。

私は日記を書くのが大好きだったが、それは母の影響だった。母は夜になると寝物語に子ども達に歴史の話や怖い幽霊の話をしてくれた。昼間は忙しい母も、その時は側にいてもらえるので、幸せなひと時だった。若い時には活動写真の弁士になろうとしたそうで、弁舌巧みに話してくれたものだった。

そのお蔭で、子ども達は歴史や本が大好きになった。母の命日は十月六日だが、今年は中秋の名月だった。

出て欲しい母の幽霊虫の夜

久子

「余計な心配」

早世の夫の墓は、実家の茨城県にも分骨したが、大阪の我が家の近くの墓地にも分骨した。いずれ私もこの墓に入るのかと思うと、いやーな気分になるが、墓に入るなんてまだ信じてはいない。妻でありながら私は夫の命日を忘れたりする。息子はちゃんと覚えていて「今日は墓参りに行こうか」と言うので、その一言で思い出したりする。

今は万事、息子が頼りで、栄養を考えた料理を作ってくれ、洗い物も私よりきれいにしてくれる。子どもの時はのんびりしていたが、山梨の航空学校に入ってから何事もきちんとする子になった。息子は脳梗塞の持病があるので、「私が先に逝って独りになったらと思うと心配だなあ」と言うと、「大丈夫だよ。この家を売って老人ホームの安いのを見つけるさ」という。先の事をあれこれ心配しないのも長生きのコツかもしれない。

戒名を故人は知らず天の川

久子